Career Power

The 19th Library Fair & Forum Document

第 19 回図書館総合展
キャリアパワー主催フォーラム記録
＜PART Ⅰ＞

2017 年 11 月 7 日 パシフィコ横浜にて開催

貴重な資料を眠らせない！　図書館における保存と利用促進
～和古書を開架へ／デジタルアーカイブで世界につなぐ～

【講師】　田中　麻巳　（立正大学図書館／古書資料館）
　　青戸　英夫　（龍谷大学大宮図書館）
【進行】　木村　麻美子　（株式会社キャリアパワー取締役執行役員本部長）

【キャリアパワー：木村】
それでは、定刻となりましたので、ただいまから第１９回図書館総合展キャリアパワー主催のフォーラムを開催させていただきます。本日は全国から多数の図書館関係の皆様にお集まりいただきまして、ありがとうございます。本日司会を務めさせていただきます、株式会社キャリアパワー事業本部の木村と申します。どうぞよろしくお願いいたします。
私どもキャリアパワーは、京都に本社を置く総合人材サービスの会社でございます。
なかでも、この図書館という業界、そして大学・教育機関という業界にご縁をいただきまして、おかげさまで、現在多数の大学様とお取引をさせていただき、大学図書館の運営のお手伝いをさせていただいております。

さて、本日のフォーラムのテーマは、「貴重な資料を眠らせない！図書館における保存と利用促進」とさせていただきました。
多くの大学図書館において、その運営のお手伝いをさせていただいていると、大学図書館が所蔵されている、非常に貴重な資料の数々に驚かされることが多々あります。特に歴史ある大学などでは、創立者の方にまつわる資料であるとか、著名な研究者の方が研究に用いられた資料など、本当に貴重な資料をお持ちで、私たちも年に数回、図書館の中で開催される展示会などで、そういった資料を拝見させていただく機会をとても楽しみにしています。
ただ、その一方で、これだけ貴重な資料を図書館がお持ちなのに、なかなか一般の利用者の目に触れる機会というのは少ないな、あるいは、こういった資料をお持ちであるという事を、もしかすると知らない利用者の方もいるのかもしれないなということを、とてももったいないな、残念だなというふうに感じる事も多くありました。
本日のフォーラムでは、多数の貴重な資料を所蔵しながら、その資料を様々な手段で利用者の方に提供して、利用を促してらっしゃる、そんな二館に焦点をあて、その運営方針について、お話しを頂きます。本日、ご参加頂きました皆様にとって、このフォーラムが、少しでも何かご参考になるところがあればいいなと願っております。

それでは、ご講演に移らせて頂きます。
本日、フォーラムの講師としてお招きしておりますのは、立正大学図書館／古書資料館、田中麻巳様、そして龍谷大学大宮図書館、青戸英夫様です。
2014 年に開館した立正大学古書資料館は、江戸時代を中心とした貴重な和古書を約 4 万 5 千冊所蔵する専門図書館です。そして、その大半を開架として利用者が自由に書架から手にとって見ることができる、また専門員による専門的なレファレンスを受け付けてらっしゃるなど、独自の取組みが非常に注目されている図書館です。

一方で西本願寺に設けられた、学寮を始まりとする龍谷大学は、370 年というその歴史から、非常に古く貴重な資料を多数有してらっしゃいます。全国から来館される研究者への現物の提供だけでなく、約 4 千冊 15 万件以上という画像をデジタルアーカイブとしてＷＥＢ公開されるなど、先進的な取組みもされています。
この二つの図書館から、貴重な資料の保存と利用促進について、本日はお話いただきたいと思います。
それでは、まず初めに立正大学図書館古書資料館の田中様どうぞよろしくお願いいたします。

【立正大学図書館／古書資料館：田中麻巳　講演】
皆様こんにちは。立正大学古書資料館の田中と申します。
本日は古書資料館について、皆様にご紹介する機会を与えていただきまして大変嬉しく思っております。3 年前に古書資料館を開館してから、どのように運営していけばよいか、より多くの方に知っていただくにはどうすればよいか、暗中模索の日々でした。

ですので、図書館総合展というこのような場で、古書資料館について皆様にお話しできることになるとは、思ってもいませんでしたので、悩んでいたかつての自分に、このような日がくるということを、こっそり教えてあげたかったなとも感じております。現在も、試行錯誤を続ける毎日ですが、今日は担当者として私が 3 年間一緒に歩んできました、私にとっていわばパートナーのような存在の古書資料館について、お話しさせていただきます。

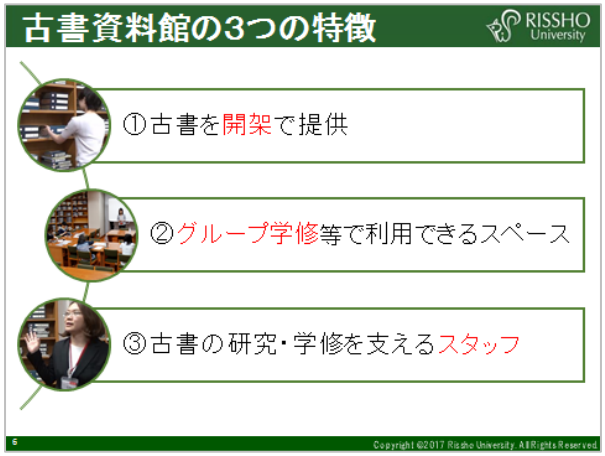
さて、本日私がお話させて頂く内容は大きく４点になります。
まず、立正大学古書資料館の概要について紹介させていただきます。次に、資料保存と利用の共存を求めて、古書資料館が誕生するに至った経緯を、続けて、古書資料館で現在取り組んでいる試みについて、お話しをさせていただきます。最後に、古書資料館の発展に向けてこれまでの成果と今後の課題とお話しをいたします。

それでは、早速、立正大学古書資料館の概要についてお話をさせていただきたいと思いますが、その前に、まずは立正大学の図書館について簡単にご説明いたします。
立正大学は、東京の品川と埼玉の熊谷にキャンパスがありまして、両方のキャンパスに図書館があります。私は、品川キャンパスに勤務しておりますが、その品川キャンパスの図書館はそれぞれ特徴を持つ４館から構成されています。まず一つ目が、学修や研究のための一般的な図書や雑誌、そして新聞を所蔵している１１号館の図書館。二つ目が、ディスカッションやプレゼンテーション練習などグループ学修で利用できる６号館のラーニングコモンズ。三つ目が、学部の図書を閉架で保管している５号館の保存書庫。そして四つ目が、古書を所蔵する８号館の古書資料館になります。

古書資料館は、古書の専門図書館として２０１４年に開館をしました。
立正大学附属中学・高等学校の別キャンパス移転に伴いまして、旧中高図書室を利用して、開館をしました。机も椅子も書架も再利用しています。中高のＯＢの方が訪れますと、図書室だったところが、

古書が沢山の古書資料館に様変わりしておりますので、驚かれるのと同時に、大変喜ばれます。そして、江戸時代の古書を中心に１万タイトル約４万５千冊を所蔵しております。そのうちの８割を開架とし、１階下の閉架書庫に残りの２割にあたります貴重書や特殊資料、巻子本や折り本を収蔵しております。
それでは、ここで、皆様に古書資料館について、具体的なイメージをお持ちいただくために、簡単な動画をご覧いただきたいと思います。少しの間、スクリーンにご注目ください。

皆様、如何でしたでしょうか。
ご覧頂いた動画にもありましたが、古書資料館には大きく三つの特徴がございます。



まず一つ目に、古書の大半を開架で提供しているという点が挙げられます。そして二つ目が、グループ学修や授業で利用できる、ラーニングコモンズ志向のスペースがあるという点です。そして三点目が、古書の研究や学習を支えるスタッフが常時いるという点です。これらの特徴を、詳しく見ていきたいと思います。
まず、古書資料館では、所蔵資料の８割にあたります約３万８千冊以上の古書が開架室にありまして、利用者の方が直接書架から取り出して閲覧することができます。古書に触れ親しむ場として機能しております。
また、古書資料館は、カウンターにて所定の手続きをして頂けましたら、一般の方のご利用も可能です。ただ、利用目的は古書に関することに限定しております。つまり、大学内にありますけれども、ただ閲覧席としての利用はご遠慮いただいている状況です。

ラーニングコモンズ志向のグループ学修スペースでは、ノートパソコンやプロジェクターの貸し出しも行なっておりまして、古書を使ったゼミや授業等で度々利用されています。古書に親しむ講座も、定期的にこのスペースを使って開催しています。
また毎年夏には、高校生のインターンシップも、このスペースで実施しておりまして、古書に触れる体験をしてもらっています。高校生にとって古書に触れるということは、異次元の出来事のようで、「古書を手にとって触れるのは初めてなので、とても感動しました」ですとか、「触る時、古書が壊れてしまわないか、緊張しましたがすごく良い体験でした」といった率直な嬉しい感想が毎年寄せられております。

古書資料館では、現在、担当の職員が１名、これは私にあたります。そして、カウンタースタッフが常時２名、専門員が１名おり対応しております。カウンターは、キャリアパワーさんに委託し対応していただいています。
それぞれの担当する業務というのは、棲み分けら

れておりまして、職員は主に館の運営方針や相互協力に関すること、カウンタースタッフはカウンター周りの対応全般、そして専門員はそれ以外の部分、古書に関する学修支援や執筆等について対応しております。
初めての来館でも心配はなく、随時カウンタースタッフが、丁寧に利用案内・館内案内を行なっています。また、職員や専門員に古書の調査や疑問点について相談することもできます。

それでは、ここからは、古書資料館が、なぜ古書を開架提供することに拘りつつ誕生したのか、その経緯をお話ししていきたいと思います。
古書を開架で提供しているという点は、古書資料館の最大の特徴といえますが、約４０年前には、資料は剥き出しのまま、閉架書庫に積み重ねて収蔵していました。あるいは、購入時に付いていた紙の箱等に入れたままの状態で保管していました。
しかも、その箱は、スライドにもありますように、壊れかけた状態のものが多く、資料を開けば大量の粉塵が飛び散り、紙魚が逃げていく様子まで確認できる、古書にとっては好ましくない環境だったというふうに聞いております。こうした状況に、館員は、何とかしなければという問題意識を持ち続けていました。

世界中でスローファイヤー問題が注目され、国際図書館連盟（ＩＦＬＡ）からは「資料保存の原則」が提唱され、それが追い風となり、同窓会から寄附金を受けて、まずは古書資料を一点一点帙に入れるところから保存対策を開始したそうです。
帙は、当時から資料のサイズに合わせて、一点一点オーダーメイドしています。折り本や軸物も帙に保存していますが、それぞれの資料サイズに合った形になっています。

そして、新しい帙の題箋は、というと、職員の筆書きから卒業生の書家の方へと引き継がれまして、今も同じ方に書いていただいています。先程の動画で、書架に並ぶ帙をご覧いただいたかと思いますが、同じ手による題箋については度々質問されます。揃っていて綺麗だなと私も思っています。

一方、新しく工夫しているものもございます。
現在では、帙だけではなくて、こうした窓付き封筒というものも用いて資料を保存しています。古文書、書簡、葉書などの資料はこうした封筒を用いています。台紙は中性紙になっております。
一枚ものにつきましては、ご覧のようなマットに入れています。窓を開けた表側のボードと、資料を支える裏側のボードを、本のように一辺で綴じた形式のマットです。このマットは、展示と保存両方で使用可能で、見栄え良く資料の展示ができるほか、ここに入れたまま保存することで、酸化物質の浸透や外からの衝撃から保護することもできます。